

## 園・地域参加型の園庭自然ふれあいの場の創生についての一考察

—園児のあそび、学び、生活環境の向上や幼小連携に繋がる園庭改善事例から—

A consideration on creation of contact with nature in preschool grounds  
through participation of school and local community  
— from actual preschool grounds development connecting to improvement of pupils' play,  
learning and life environments and co-operation of preschools and elementary schools

仙田 考\*

Ko SENDA

### 要 旨

子どもを含む園・地域参加型の園庭自然ふれあいの場の創生事例から、その効果および方策について検討した。園庭自然ふれあいの場の創生により、園児のあそび、学び、生活環境の向上や自然環境を通じた幼小連携の実現への可能性、園児と大人、大人同士の活動、交流、安らぎの場となることが見られた。参加型環境創生においては、園事業として実施し、保護者クラブの組織化や地域との協力が有効であり、園児が行える活動の範囲で、多くの関わりの機会を設けることが重要である。

キーワード：園庭改善、自然、参加型環境創生

### 1. はじめに

幼稚園教育要領では、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、(中略) 幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」とあり、幼児教育と環境との関係性について述べられている。

さらに領域環境の「ねらい」の中では、「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」とあり、自然とのふれあいの機会を通して、興味や関心を持ち、成長に繋がる基礎を培ってゆくとし、領域環境の「内容」の中でも、「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」など、11項目の内4項目で幼児の自然との関わりについて触れられているように(文部科学省, 2008)、幼児教育において自然環境の大切さは計り知れない。

現代の子どもたちは、都市化による身近な自然環境の減少や(仙田ほか, 1998)、住宅の高層化(織田, 2006)、ゲーム等の室内遊び時間の増加(仙田, 1992)、屋外での体験不

足(亀山ほか, 2005)等により、屋外あそび、特に自然遊びの機会が昔の子どもたちと比べ少なくなっていることが危惧されている。

幼稚園の園庭は、園に通うすべての子ども達にとって、最も身近で安全に過ごすことができる、屋外のあそび、学び、生活環境であり、園庭環境の質が重要と考えられる。

幼稚園施設整備指針の総則においても、「豊かな感性を育てる環境として、自然に触れることのできる空間を充実することが重要である。」とあり、第4章園庭計画のなかでも、運動場、遊具とともに、園庭に動植物とのふれあいや、栽培、飼育などの施設を計画することの有効性について述べられている(文部科学省, 2014)。

1990年代以降、地域生態系のミニモデルとして、小さな自然とふれあえる、池や小川、森や草原といった「学校・園庭ビオトープ」を校庭や園庭に創生する動きが生まれてきた(日本生態系協会, 2008)。

幼児にふさわしい自然体験の環境を整えるために、園庭を改善してゆくことは大変に重要であることと考える。園庭のみならず小学校の校庭にも豊かな自然とのふれあい空間があることで、地域自然生態系のネットワークや自然学習の繋がることも考えられる。

しかし、筆者が小学校を対象に行った校庭に関する調査

\* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

(仙田, 1999) によると、多くの学校で知識・方法・時間・予算がなく、校庭改善を実践することは難しいと答えており、幼稚園においても同じ課題により、園庭改善の実施が阻まれているということも予想される。

英国の校庭・園庭改善支援 NGO である Learning through Landscapes は、成功的な校庭・園庭改善のプロセスとして、

- ・ participative 環境改善へのこどもの参画
- ・ holistic 園全体の敷地、園及び地域コミュニティ、学習・あそび内容を考慮
- ・ sustainable 環境への配慮や長期間の計画で実施

の3つの指標を挙げており (Adams, 1990)、子どもを含めた園・地域参加型で取り組むことが、園庭改善を進めてゆく大切な要素であると考えられる。

そこで、本稿では筆者が園庭整備の専門家として協力依頼を受けて関わり、子どもを含む園・地域の参加により取り組まれた、園庭自然のふれあいの場創生の3事例を通して、参加型の園庭改善のための方策について検証を行うものとする。

2. 参加型自然ふれあいの場創生の取り組み

事例1：SK 幼稚園「ふれあいの森」、「遊林園の森」

1) 創生前の園環境について

千葉県四街道市の SK 幼稚園は、駅から程近い、郊外の住宅地内に立地する私立幼稚園である (園庭取組み当時。その後2011年度に認定こども園化)。2007年春に、築30年以上の既存園舎の保育室棟を耐震補強・改修、遊戯室・事務室棟を建替するにあたり、園庭整備の専門家として筆者が関わった (園創立後約40年。園児数は約140名)。

本園の環境は、園舎北側に広がる理事長宅の竹林が特徴的である。元々園舎南側に運動場や遊具を含む広大な園庭を有していたが、改築前、竹林側は園舎の壁により閉じられ、また園庭側から竹林に至る容易な動線は無く、園児が日々の生活の中で、竹林そして多様な自然とふれあえる機会は少ない状況があった。

園舎改築の際、竹林の一部を園敷地として拡張することとなり、耐震補強部の保育室棟北側の空地 (約500㎡) を、園は、園児の自然とのふれあいの場として新たに整備活用していきたい、という想いがあった。この空地に面して、新遊戯室や既存保育室棟の屋内廊下が設けられ、視覚的・動線的に身近な自然ふれあいの場を計画することとなった (図1)。

2) 自然・農体験の場「ふれあいの森」の創生

i) 計画内容

自然ふれあいの場の計画についての園打合せは、園舎建築工事終了前の2006年12月から始まった。筆者は園から、園舎北側の新園庭部についての要望を伺い、プランの作成・提案を行い、園との協議の上、総合的な自然・農体験が行える場を創生することとなった (整備後、自然や人々とのふれあい空間として「ふれあいの森」と名付けられた (図2、写真1)。

「ふれあいの森」は、次の4つのエリアからなる昔ながら



図1. 現在の園の配置構成



図2. ふれあいの森の構成



写真1. ふれあいの森と竹林



写真2. 整備1年後 (2008) 草原のエリア (写真2, 3中央)



写真3. 整備8年後 (2015) 森のエリア (写真2, 3左側)



写真4. 水辺のエリア (池)



写真5. 農のエリア (畑)

の四街道の里山風景で構成されている（写真2～9）。

<森のエリア>クヌギ、コナラなどドングリのなる樹木

<草原のエリア>バッタなど虫が訪れる草原

<水辺のエリア>クロメダカやトンボのヤゴが息する生態池、せせらぎ

<農のエリア>水田、花壇・畑、果樹園、飼育小屋（クジャク。南側の園庭から移設）

「ふれあいの森」計画に当たり、特に配慮を行った点は以下の3点である。

#### ①多様な自然、農体験の場の創出

改築前は、園舎南側の園庭に樹木は点在しているものの、虫を多く見つけられるような、自然遊びが豊富にできる環境ではなく、また、栽培活動は園駐車場の車道向こうの畑で行っていたが、園庭内ではないことから訪問頻度は多くなかった。

自然ふれあいの場の整備に当たっては、樹林(森のエリア)や草原(草原のエリア)、生態池、せせらぎ(水辺のエリア)、水田、畑、果樹園、飼育小屋(農のエリア)など、多様な自然、農体験の場を設け、土、草、木、水、昆虫、栽培植物、野生動物、飼育動物などの様々な自然との出会いの空間となるよう計画を行った。

#### ②地域の自然との一体性

竹林と隣接する空間であることから、自然空間の創出に当たっては、できるだけ地域生態系や生物多様性に配慮することとした。

竹林に最も近い「森のエリア」では日本古来の里山の樹木を選択・植樹し、「水辺のエリア」の生態池の水草や魚類(メダカ)は市内の湿地の植物やクロメダカを導入した。また、新遊戯室建設に当たって伐採せざるを得なかった樹木をベンチ兼平均台として再活用し、環境資源としての配慮を行った。

また、遊戯室、保育室北側廊下から竹林に向かって空間が大きく開けることから、新しく創出した自然空間と合わせて、竹林と一体となる自然美を全面に見せる空間構成をとった。

#### ③保育空間での活動との連続性

「ふれあいの森」での自然活動が、新遊戯室や保育室前の廊下で行われる保育活動とも連続するよう配慮した(写真10)。

新遊戯室に最も近い「草原のエリア」は、草地での小昆虫との出会いの場だけでなく、遊戯室の舞台を屋外ステージとしても活用できるよう、遊戯室前に半円のマウンドを作り、中央部は草地とし、子どもたちや大人が座って楽しめるような空間とした(写真11)。

また、保育室前廊下から見える位置に、畑や果樹園、飼育小屋を配し、雨天時でも窓から生長・成長の様子がのぞけるようにした。

#### ii) 創生方法

「ふれあいの森」創出の方法としては、筆者から園児、教職員、保護者、地域も含めた参加型で行うことを提案し、園に受け入れられた。園庭整備の資金については、平成18



写真6. 農のエリア（水田）



写真7. 農のエリア（竹林）



写真8. 農のエリア（果樹園）



写真9. 農のエリア（飼育小屋）



写真10. 果物を廊下で調理



写真11. 屋外ステージで観覧



写真12,13. 水田づくり（シート敷きと土被せ）



写真14,15. もち米作り（代かきと田植え）



写真16,17. もち米作り（生長見守りと稲刈り）



写真18. もちつき



写真19. メダカの放流

年度の千葉県教育改革推進モデル採択事業補助金を活用した。(平成19年度も活用し、より多くの果樹の植樹を行った)

実際の整備に当たっては、地ならし等の土工事や、既存の井戸から新設池までの配管設備工事の一部は園舎建築工事の外構業者が担当したが、それ以外は園関係者の手作りで行われた。

SK 幼稚園では、それまで母親が活動する「園芸クラブ」(畑での野菜栽培や収穫、調理を行う)があったが、父親のクラブは無かった。そのため理事長発案で、父親が活動する「里山クラブ」を立上げ、段階的に園庭整備活動を実施してゆくこととなった。

業者による基礎整備が終了した2007年2月に、生態池と小川、築山づくりを、3月に水田づくりを「里山クラブ」の父親とその子どもたち、園の教職員とともにいった。水田づくりでは、四街道市の環境 NPO「四街道食と緑の会」の副会長にご指導を頂き実施した。四街道市は小学校の食育教育活動として、学校水田での稲づくりを実践しており、当団体は市内全小学校の学校水田づくりや稲づくりの指導に携わっている(写真12~14)。また、本幼稚園の新設生態池の水草(セリ、サンカクイ含む)や魚類(クロメダカ含む)は、当団体が維持管理・活用に関わっている市内にある自然の湿地から、会副会長の指導のもと導入したものである。

「ふれあいの森」創出時の園児の関わりとしては、安全上の配慮から、池や田んぼの穴掘りなどは行わなかったが、年長組による卒園記念の苗木の植樹(アマナツ)や、年少組による生態池のメダカの放流(写真19)、里山クラブの親子活動での園路整備など、幼児でも参加できる活動を企画・実施した。子どもたちの環境への思い入れやその後の興味関心にもつながっている。

### iii) 創生後の活用、維持管理状況

「ふれあいの森」は創生以降、園児の自然あそび(泥あそび、虫の発見等。写真22)、池の観察、年長組によるもち米づくり(写真15~18)、野菜栽培や果実の収穫・食体験、飼育動物の世話等、園児の様々な自然とのふれあい活動に活用されている。園は2011年度より認定こども園化し、幼児とともに乳児も自然とふれあうことができる場となっている。(なお安全上、「ふれあいの森」は教職員と一緒に来ることになっている。)

園から最寄りで卒園児が多く通う Y 小学校には学校水田があり、「ふれあいの森」創生後の2008年には学校ビオトープ池が整備された(整備に当たっては、SK 幼稚園の池が参考にされた。写真20, 21)。幼小ともに水田、生態池があり、幼稚園での自然体験が小学校での学習へと連続している。自然活動を通じた幼小連携が可能な環境となっている。

「ふれあいの森」の維持管理(水田の代掻き、池の清掃、畑や竹林整備、コンポスト作り等。写真23)は、園教職員とともに代々の「里山クラブ」の父親達に引き継がれ、子どもたちのために、休日を利用して続けられている。池の掃除の際は、かつて「ふれあいの森」で遊んでいた卒園児



写真20, 21. 近隣小学校の学校水田(左)と池(右)



写真22. 丸太の裏の昆虫探し 写真23. コンポスト作り



写真24, 25. 園芸クラブの栽培タデアイの藍染



写真26, 27. 収穫野菜の調理(左)、園芸クラブの炊出し(右)



写真28, 29. 森のリーフレット(左)、廊下の掲示板(右)



写真30. 遊林園の筒型遊具 写真31. 植樹会(設置)



写真32, 33. 植樹会(穴掘り:左、植樹:右)

の小学生も毎年参加して、池の中にいる生き物の観察を行っている。維持管理活動のみならず、父親達の「里山クラブ」、母親達の「園芸クラブ」による、収穫したもち米の餅つき会、栽培タデアイの藍染（写真24, 25）や収穫野菜のカレー作り（写真26, 27）など、子どもたち、園職員、保護者、地域の方との交流の場としても活用されている。自然のなかでの協働活動を通して、子どもたちや園のために関われる喜びや仲間とふれあえる楽しさが生まれている。

また理事長は、悩みを抱えた保護者が園に相談に訪れた際は、「ふれあいの森」が見える遊戯室に来てお話しするという。自然豊かな落ち着いた風景の中で話をしていると、自然と前向きな気持ちになるようである。

また、園発行のリーフレット「ふれあいの森の四季」（写真28）、自然活動を紹介する廊下掲示板（写真29）、園のブログ等を通して、園児や保護者クラブによる園庭の自然ふれあい活動の発信を積極的に行っている。

### 3) 「遊林園」の森づくり

#### i) 計画内容

園舎南側の園庭の大型鉄製遊具の老朽化に伴い、2009年から2010年にかけて、既存遊具の撤去および新遊具エリアの整備が行われた（写真30）。園のシンボルツリーでもある、竹林の筍をモチーフとした形状の鉄製遊具が12個点在し、ネットや滑り台、内部に鏡、レンズ、カウベルなどさまざまなあそびツールが取り付けられている。エリア中央には築山と砂場が配されている。筍型遊具が立ち並んでいることから「遊林園」と名付けられ、子どもたちの遊びに活用されている。

整備後、「遊林園」の周囲に真夏時の日陰になる樹木が無いことや、園舎南側の園庭内でも森の木々とふれあえる機会を作りたいということから、「遊林園」周囲に里山の樹木（コナラ、クヌギなど）を植樹して森づくりを行うこととなった。

#### ii) 創生方法

2010年3月、「里山クラブ」の親子、園教職員とともに、遊林園植樹会で、地域の造園業者の方に植え方や支柱の立て方を指導いただきながら行った（写真31-35）。本事業は財団法人都市緑化機構の「第10回（2010年度）花王・みんなの森づくり活動助成」に応募し、採択の上実施された。

#### iii) 植樹後の活用、維持管理状況

その後植栽された樹木は生長して木陰を作り、森の雰囲気を作りつつある。新緑、花、どんぐりなどの木の实など季節変化が感じ取れる場所となっているという。また、維持管理活動は地域の造園業者の確認とともに、園及び「里山クラブ」で行われている。

## 事例2：KH 幼稚園「KH ビオトープ」

### 1) 整備前の園環境について

横浜市都筑区のKH 幼稚園は、駅から程近い住宅地内に立地する創立後60年以上となる私立幼稚園である（園児数は約270名）。2009年度に、それまで園児には開放していなかった、園敷地と隣接する園長宅の庭の一部を、子どもた



写真34, 35. 植樹会（支柱取付け：左、記念撮影：右）



図3. KH ビオトープ空間の計画資料



写真36, 37. 井戸掘り（穴掘り：左、水が出た瞬間：右）



写真38. 完成後の様子



写真39. 園児が水草を導入



写真40. あそびの様子

ちが身近な自然とふれあえる空間としていきたいとの思いがあり、その具体的な計画立案に、園庭整備の専門家として筆者が関わることとなった。

i) 計画内容

KH 幼稚園は遊具や小山がある広い運動場が特徴的であるが、自然豊かな場所が少なく、自然遊びの内容が限られていた。そこで、草原や木立、せせらぎや小川、田んぼといった子どもたちがそこにある自然や訪れた生き物に直接ふれることができるビオトープ空間（整備後、「KH ビオトープ」と名付けられる）の創生を計画した（図3）。

また、園長宅には木造住宅や蔵があることから、その雰囲気と合う、昭和初期の頃の横浜の民家の風景を思わせ、自然体験、農体験ができる庭とした。同時に、小さな子どもたちが庭での散歩を楽しむことができるよう、丸太の小道や樹木のトンネルなどのあそび要素も加えた。

<蔵前のエリア>

小広場、自然の池、手押しポンプ、菜園、水田、果樹園などで構成し、土の園路や丸太のあそび道で回遊動線を設けた。

<蔵横のエリア>

柳のトンネルや柳のプレイハウスを創生した。

ii) 創生方法

「KH ビオトープ」の整備に当たっては、地ならし等の土工事、植栽工事等は外構業者が担当したが、園関係者が関わった部分として、手押しポンプの井戸掘りや土間打ちは、井戸業者の指導の下、以前から活発に活動している、幼稚園の「おやじの会」の父親達、園教職員の手作業で行われた（2009年10月。写真36, 37）。井戸掘りや土間づくりは、皆で力合わせて行い、和やかな雰囲気の中楽しんで実施された。

また、市内で地域種のメダカを育てている「横浜メダカの会」の方から、横浜メダカ、ドジョウ、水草（カナダモ含む）を小分けいただき、園児が放流を行った（写真39）。

iii) 創生後の活用、維持管理状況

「KH ビオトープ」は、園長宅の庭にありながら、園児が保育中、日常的に遊びに訪れてよい場所となっており、園児の自然あそび（写真40）、稲づくり（写真41）、生き物の観察（写真42）、野菜栽培や果実の収穫・食体験、園路や柳のトンネルの周遊等、園児の自然とのふれあい活動に積極的に活用されている。また、維持管理活動（水田や畑、池の清掃等）は、園教職員とおやじの会の父親達で続けられている。

事例3：TK 幼稚園「おやま」の森づくり

1) 整備前の園環境について

横浜市旭区のTK 幼稚園は、住宅地内に立地する創立50年となる私立幼稚園（園児数約160名）で、園庭は広い運動場（写真43）と築山（写真44）が特徴的である。2009年春に、園庭の角に位置する築山を拡張して、さらにダイナミックなあそび場として変えていきたい、合わせて築山と融合する土管遊具を計画したいとのご相談を受け、筆者が



写真41. 稲刈り前の田んぼ



写真42. 生物の観察



写真43. TK 幼稚園園庭



写真44. 拡張前の築山



写真45. 拡張後の築山



写真46. 植樹会（植え方説明）



写真47, 48. 植樹会（苗木の植込み）



写真49. 植樹会終了



写真50. 植樹3年後（2015）



写真51. 植樹3年後。当初より樹木が生長している

計画設計をし、夏休み工事で築山拡張と遊具工事を行った（施工は地元外構業者。築山は「おやま」と呼ばれている。写真45）。その後、築山が将来森の斜面となるよう植栽をしたという話があり、その具体的な計画立案に、引き続き筆者が関わることとなった。

#### i) 計画内容

園庭には築山の頂上部も含めて巨樹が数本あり、それに連続するかたちで築山に森の木立を創生する計画とした。園の要望により、実のなる木（ブルーベリー・ザクロ・グミ・ヒメリンゴ・カリン）、季節を感じる木（イロハカエデ・コナラカツラほか）、匂いのする木（ジンチョウゲ）を中心に選択し、それらを低木とともに築山上の4か所の植栽帯に配植することとした。

#### ii) 創生方法

2010年3月、地域の造園業者の方に指導を頂きながら、年長組の園児が中木の苗木の植樹を行った（写真46～49）。資金は神奈川県私学振興課「私立幼稚園等緊急環境整備補助事業」が活用された。予算の関係から、高さ1.5mから1mの中木の苗木と、高さ0.3mの低木の植栽となった。

#### iii) 植樹後の活用、維持管理状況

その後植栽された苗木は生長し、木立の雰囲気を作りつつある（写真50, 51）。子どもたちが実を食したり、木の実や紅葉で季節を感じる機会となっている。

### 3. 園庭自然ふれあいの場創生の効果

園庭の自然ふれあいの場が創生されたことにより、事例3園にもたらされた園庭改善の効果として、主に以下の2点が挙げられる。

#### 1) 創生された自然とのふれあいを通して、園児のあそび、学び、生活環境の向上や幼小連携の機会につながった

創生前、各園では樹木やプランター、菜園はあったものの、あそびのなかで関われる自然は少なかった。自然ふれあいの場の創生により、園生活の中で多様な自然と出会い、あそびを通して多くのことを学んだり、季節の変化に気づいたりするなど、身近な自然とふれあえる機会が多く生まれるようになった。

また、幼稚園・小学校ともに、敷地内に池や樹林、田んぼ、菜園などの自然ふれあいの場があることで、幼稚園での自然遊びの体験が、小学校での生活科や理科での自然学習活動にもつながり、自然環境を通じた幼小連携の実現の可能性が見られた。

#### 2) 園児と大人、また大人同士（教職員、保護者、地域）の活動、交流、やすらぎの場となった

自然ふれあいの場の創生をきっかけに、園児、教職員、保護者、地域がともに活動し、交流できる機会が生まれた。

園児にとっては、親たちが子どもたちのために活躍する様子を直に見ることができる機会となり、また、保護者自身も子どもたちのために活動ができることを喜びと感じている。園児は卒園児、保護者、地域の方々など、年長者との交流から様々なことを学ぶことができ、関わる大人自身も環境について深く知ることができる機会となっている。

また、保護者同士、園と保護者、園と地域など、人のつながりが多く生まれる機会となっている。そして、自然とのふれあいや風景からの癒しを受けて、ほっとできる居場所にもなっている。

### 4. 園庭改善と子ども、園、保護者、地域の関わり、参加性について

#### ①園事業として実施、保護者クラブの組織化や地域との協力

園庭自然のふれあいの場創生が難しいことの原因として、園側の、自然創生についての知識やアイデア、また準備や実践にかけられる時間や予算などが十分でないことなどが予測される。報告の3事例から、これらの方策として、

##### i) 園全体で行い、園の事業として実施する

##### ii) 保護者、地域の協力を仰ぐ

などの検討が考えられる。

まず、園庭改善に取り掛かるにあたっては、自然環境について興味関心の高い、一部の教職員のみではなく、園一体となって事業を進めてゆくことが重要である。特に理事長、園長など園幹部の理解は欠かせない。予算不足の点でも、園で申請する公共補助金や民間緑化・環境助成金の活用が大きな手助けとなる。

また、保護者や地域の協力を仰いでいくことで、アイデアや労力、資源提供などの点で大きな力を得ることが可能となる。特に保護者や地域には、子どもたちのために力になりたいという思いを持っている方々も多く、中には工務店や設備、造園業者、環境NPOなど、施設・環境整備に関わる仕事をされている方がいて、実践的な指導・協力を得られる可能性もある。

自然創生をきっかけに、保護者のクラブ活動などを立ち上げ、組織化を図ることも有効な手段である。創生後の園での交流活動や自然空間の維持管理活動の継続にもつながる。また、地域の方々の見守りやご協力を受けることも可能となる。

また、今回の報告では筆者が園庭改善の専門家として関わり、子ども、園、保護者、地域を繋げる役割を果たしている。できる限り、園、地域参加を園庭改善活動の主体とし、継続性のある園庭活用、維持管理、さらなる改善を見据える姿勢が重要である。

#### ②園児が出来る範囲で関わりを計画

園庭改善に当たっては、子どもたちができるだけ創生過程に参加できる機会を設けることが望ましい。その際、幼児でも実施可能な活動に配慮することが大切である。たとえば、池堀りや園路づくりの体験、苗木の植樹やメダカの放流などが考えられる。こうした園庭改善の創生に直接関わることで、思い入れが深まり、その後環境の変化への興味、関心につながる事が考えられる。

実際には、池堀りなどの最終的な仕上げが必要な作業は、園児のみで行うことは難しく、年長者や大人、業者らが行うこととなるが、その際工事の進行状況を、安全を確保しつつ、できるだけ子どもたちに見せることで、創生に関わっている意識や完成する楽しみを持たせることにもつなが

ることが考えられる。

## 5. まとめ

本稿では、筆者が関わった園・地域参加型園庭自然ふれあいの場創生の事例から、参加型の園庭改善のための方策について検証を行った。

園庭自然ふれあいの場の創生は、園での子どもたちの自然とのふれあいの機会を増やすことにとどまらず、小学校の自然学習礎にもつながる幼小連携の手立ての一つともなる。また園庭改善を園の事業として捉え、園児、園教職員、卒園児、保護者、地域などの参加、特に保護者の組織化や地域の協力体制による実践を通して、創生した環境への思い入れや、興味関心、継続的な活動（維持管理含む）へのつながりがみられた。また、参加型の園庭改善により様々な人がつながり交流を深める機会となり、完成後もそれぞれの人にとりほっとできる居場所となっている。

今後も機会があれば、子どもたちが豊かな自然環境と出会え、様々なひとがつながりあえるような、参加型園庭改善への支援を目指していきたい。

## 謝辞

本稿執筆に当たり、資料提供やヒヤリングにご協力いただいた3園の理事長先生方、並びに3園の園庭整備に関わられたすべての方々に、深く感謝の意を表します。

## 引用文献

- ・文部科学省（2008）幼稚園教育要領。
- ・文部科学省（2014）幼稚園施設整備指針。
- ・仙田考（1999）小学校における校庭利用・デザイン・校庭づくりの現況—アンケート調査を通じての報告。日本環境教育学会第10回大会研究発表要旨集，日本環境教育学会，pp.42
- ・仙田満，三輪律江，岡田英紀，渡辺拓，矢田努（1998）日本における1975年頃から1995年頃の約20年間におけるこどものあるそび環境の変化の研究，都市計画211，pp73-80。
- ・織田正昭（2006）高層マンション子育ての危険—都市化社会の母子住環境学。メタモル出版。
- ・仙田満（1992）子どもとあそび—環境建築家の眼。岩波新書。
- ・亀山秀郎，嶋崎博嗣，北尾岳夫（2005）幼児と両親の原体験に関する世代間比較研究—兵庫県私立K幼稚園・N幼稚園における自由記述調査から—。幼年児童教育研究（17），pp23-31。
- ・財団法人日本生態系協会（2008）新装改訂版 学校・園庭ビオトープ。講談社
- ・Adams, E. (1990) Learning through landscapes : a report on the use, design, management and development of school grounds. Winchester : Learning Through Landscapes Trust.